

「箱入り」

—2 稿—

2024/9/8

米俵

〈人物表〉

高橋 聡美 (43) 主婦

高橋 恵子 (64) 姑

高橋 壮輔 (36) 息子

〈ログライン〉

・ 恵子は、息子を取り返すため家に入るが、殺される話

・ 聡美は、壮輔を独占するため恵子を殺し、新しいママになる話

〈ねらい〉

・ ホラーを書く

1. 高橋家・外観（昼）

築40年程度の大きめの一軒家。
カーテンは全部屋閉められている。
庭の手入れはされていない。ボロボロの犬小屋と繋がれた首輪。犬はいない。
錆まみれの子供用自転車が倒れている。

2. 高橋家・玄関・外（昼）

インターホンを押す女性。顔は分からない。
真っ赤な靴を履いており、つま先には大きなダリアの装飾。
室内からの応答はない。
扉を何度もノックする。だんだんと強く叩く。
年配の女性の声「聡美さん？ 聡美さんいるんでしょう？」
扉を開けようとする。
年配の女性の声「壮ちゃん？」

3. 高橋家・玄関・中（昼）

薄暗い玄関。靴は一足も出ていない。
靴箱の上には和風アレンジ（剣山使用）の造花が透明ケースに入れられ、飾られている。
ガチャガチャと扉を開けようとする音だけが響く。

4. 高橋家・室内（昼）

薄暗いLDK。リビングの棚には家族写真が飾られている。
高橋聡美（43）キッチンで昼食の準備をしている。
玄関から声がするが無視している。
聡美、昼食を二階へ運ぶ。足音を立てずに歩く。
部屋をノックして、ゆっくりと扉を開ける。
部屋の一部には、玩具やペン、落書き帳が散らばっているが、それ以上は見えない。
聡美、昼食を置き、ゆっくりと扉を閉める。
一階から鍵を開ける音。

聡美、落ち着いた様子で階段を降りていく。

ドアガードだけの状態の玄関扉。そこから高橋恵子

(64)が覗いている。

恵子 「あつ、聡美さん。丁度良かった。開けてくれない？」

聡美に慌てる様子はない。扉に近付き、

聡美 「お義母さん、またいらっしゃったんですか？」

恵子 「ね、早く開けて」

聡美 「突然来られても困りますので」

恵子 「外暑いよ。中に入れて頂戴」

聡美 「(笑顔で)お帰り下さい」

恵子 「壮ちゃんに会ったらね」

と言って、力いっぱいドアを引っ張る。ガシャンという音が家中に響き渡る。

聡美 「壮輔は寝ています」

恵子 「はいはい」

と、ゴムを使い、ドアガードを外す。

聡美、開くのを押さえる。

力を入れているが、涼しい表情。

ドアの引っ張り合いになる。

恵子、険しい表情で、

恵子 「なんで、息子の家に入るのにこんなことしなきゃいけないのよ」

聡美 「私の家でもありますので。どうぞ、お帰り下さい」

恵子 「元は私の家ですけどね？」

恵子が力負けし、ドアがボタンと閉まる。

聡美、鍵を閉める。

ドアスコープから外を確認する。

人の気配はない。

聡美、ドアガードに付けられたゴムを取る。

リビングの方から窓が開く音。

聡美、リビングへ向かう。

× × ×

恵子、ソファアに座って、

恵子 「あー、涼しい」

ガラスがくり抜かれ、鍵があいている。

聡美、落ち着いた様子で、

聡美 「お義母さん。靴……脱いでもらえますか？」

恵子 「私ったら。海外にいた頃の癖がぬけないのねー」

恵子、面倒臭そうに靴を脱ぎ、ソファアの上に置く。

恵子 「ねえ、お茶も出ないの？」

どす黒く濁ったお茶を指して、

聡美 「そこにありますよ」

恵子、確認して、不機嫌そうな表情。

グラスをひっくり返す。

固まった茶葉と一緒に爪や髪の毛が出てくる。

溜息をつき、鞆からペットボトルを取り出し、飲み

干す。

恵子 「聡美さん、こんなことして楽しい？」

聡美、笑顔で返す。

恵子、棚の写真（子供の写真）を手に取り、

恵子 「あー、可愛いねー」

と、愛しそうに眺め、写真をさする。

聡美 「ありがとうございます」

恵子 「なんで、貴方がお礼を言うの？」

聡美 「私の子ですから」

恵子 「は？」

聡美 「何か？」

恵子 「私の子だよ」

聡美、笑って、

聡美 「お義母さん面白いですね」

恵子 「あーあ。本当おかしな嫁をとっちゃったよ」

と、階段へ向かう。

聡美、すぐ後ろをついていく。

廊下に出る二人。聡美、恵子の腕を掴み、

聡美 「お義母さん。お手洗いでしたら、こちらですよ」

と、そのまま強く引っ張る。

恵子、転倒するが、受け身をとる。

立ち上がりながら、

恵子 「聡美さん、bathroomの場所は教えて頂かなくて結構」
聡美、作り笑いで、

聡美 「そうですか」

恵子 「壮ちゃん、壮ちゃん」

と、大声で呼びながら、階段へ。

恵子、すぐ後ろにいる聡美を確認し、階段の手すりをしっかりと掴み上っていく。

聡美、すぐに恵子の服を掴んで、

聡美 「もう宜しいじゃないですか」

恵子 「何が」

聡美 「元気でやっていますから」

恵子 「（強めに）あんたが閉じ込めてるのは知ってるんだよ」

聡美 「私が？」

恵子 「あんた以外に誰がいるの」

聡美 「勘違いですよ」

恵子 「いいから、放しなさいよ」

と、聡美の手を振り払い、階段を駆け上がる。

聡美、恵子の足をつかむ。

恵子、振り払おうともがく。

ヒートアップする二人。

聡美、恵子に押され、階段から落ちる。

恵子、その隙に部屋の前まで駆け上がる。

ゆっくりと扉を開けながら、

恵子 「壮ちゃん、お迎えに来たよ」

少年の声「ママ？」

恵子、部屋の中へ入っていく。

× × ×

聡美、物凄い形相で玄関の生け花の剣山を掴む。

階段を駆け上がる。

ゆっくりと部屋の扉を開ける。

正座した恵子の後ろ姿。恰幅のいい男、高橋壮輔（

36）に乳を飲ませるような仕草をしている。

恵子 「ほーら、壮ちゃん。ママのおっぱいですよー」

壮輔、声変わりしていない声（少年の声）で、子供

がぐずるように、

壮輔 「んーん。やー」

恵子 「どうしたの。ご機嫌斜めかなー？」

聡美、ゆっくりと近付き、恵子の脳天に思いっきり
剣山を突き刺す。

恵子 「きゃー」

恵子、転げまわる。

聡美、部屋の外に恵子を引っ張り出し、ドアを閉め
る。

恵子、顔面血だらけになり、うめき声をあげている。

聡美、恵子に馬乗りになり、

聡美 「お義母さん。あとは任せて下さい」
と、繰り返し剣山を突き刺す。

恵子、ぐったりとする。

聡美、恵子を見下ろし肩で息をしている。

部屋から、壮輔の泣き声が聞こえてくる。

聡美、急いで部屋に入り、壮輔を抱き締める。

子供をあやすように、

聡美 「壮ちゃん、恐くない。恐くないよ」

壮輔の背中をポンポンと優しく叩く。

壮輔、泣き止んで、聡美の顔を見つめる。

壮輔 「まーま、おっぱい」

聡美 「はいはい」

嬉しそうな聡美。

5. 高橋家・玄関（夜）

真っ暗な玄関。

靴箱の上のケースだけが光っている。

ケースの中には、人間生け花として飾られた恵子の
死体。口には、恵子の靴についていたダリアが入れ
られている。

（終わり）